

安心問答

佛陀禪那弁榮聖者

問 宗教に入ては先ず第一に安心じんを決定じようせよと承わりぬ。全体安心とは云何いかのことなるか。

答 安心とは、信仰の目的、主義、行法しきとを確しかときめて、それに心を安置おきて動かさぬことを云う。即ち信条が心にしかときまつたことである。

問 信条とは何いかなるか。

答 三条あり、一、所求ぐ、二、所帰、三、所行ぎよう、これを決定するを安心と云う。

問 所求とは何をか求むべき所なるか。

答 信仰につきて要求する心即ち救を求むる目的である。何の要求もないのに信仰の発おとる故わけはない、例えば現世の利益を求むるとかまた未来の往生を求むるとかを云う。

問 所帰とは何なる者に帰依信頼すべきか。

答 自己最大の要求を容れて救い下さる神尊かみを定むるので、即ち全く自分の信頼する所の本尊

を確と定めて信ずることである。

問 所行とは云何。

答 自己を救い下さる神尊がいかにせば其聖旨に契うて救い下さるか其行法である。また救を受ける方法である。上の三条が確にきまつたのが安心のできた人と云う。

問 宗教の信仰に、低級なものと高等なものと階級ありや。

答 大に信仰の階級あり。従来機教相応と申すことあり。機とは人の知識の程度にて低級な人に教が余り高くては手が届かぬ故に、其教法を手に入れて自分のものと為ることができぬ。また、高い人に教法が低いと、一心に信奉する心が起らぬ。宗教は一心に生命を賭して信奉せざれば救の実を得ることできぬ。故に機類と教法とが相応しなければ完全に信仰が成立せぬ故に、人に階級ある故に随て信仰に自から高低のあることである。

問 宗教の階級とは云何。

答 実には数多の階級あり。今暫く三階に分ちて明せば一、自然教（現世教）二、超自然教（未来教）三、円具教（光明主義）の三教である。

問 初の自然教の安心はいかに。

答 自然教は最も低級の信仰にて、其要求するところ現世の肉体の幸福を目的とす。例えば病

氣平癒を祈り又は災難を免るる為、或は延命を祈り、又五穀豐稔家内安全等の如き甚しきは投機業の運を祈るような者さえある。夫らは幼稚な信心なので、未来の靈魂の幸福を求むるような遠大の希望はもたぬ。

問 自然教は云何なる神を信ずるや。

答 自然物の中或は日月星宿を神と祭り、また高山には神ありとし、水火風雷も神なりと謂い、即ち八百万の神を立て、其神に向て現在の幸福を請求するのが自然教の神と云う。

問 自然教では云何なる行法を用いて神を信ずるや。

答 此信仰は現在の肉体の幸福を求むるのであるから矢張り肉体を苦しめざれば神は助けて下さらぬものと信じ、行水、断食、跣行^{はだしより}等を為し、又行者が祝詞^{のりと}を捧げ咒文を誦し千巻經を読み等の種々の行を以て神に祈祷する等の行法とす。之を自然教の信条とす。

問 自然教はいかに宣伝して行わるるや。

答 自然教は幼稚なる思想の人の弱点、病氣とか又種々の災難等に遇う時は、或は行者の媒介^{なかだち}を借り又は自から神を祈る等を以て信仰を為す。例えば土地に雜草は自然に繁殖する如くに行わる。高等なる宗教は土地に稻を作るに耕耘^{くんげん}培養を要する如くに宗教家がつとめて宣伝せざるときは行われぬ。自然教の現世祈りの肉体の幸福のみを求めて、人格の核なる心靈を立

派にして人間の善き果を結ぶ目的の高等なものでない。雑草のような現世祈りと米の果を結ぶような未来教とは大いに異つておる。

問 第二の未来教（超自然教）の信条はいかが。

答 未来教の信仰の目的は現世の幸福を祈る宗教よりは高等である。此の教では現世の幸福を求めず専ら後世の幸福を要求す。謂く現世の運命は先生の宿因である。いかに仏の力として宿業は転ずることはできぬ。また仮の世の幸福は神の力を仰ぎてまで求むるのは不当である。唯後生の極樂に生れて永劫の幸福をこそ求むべきであるとの教で、この要求が動機となるを未来主義と云う。此教の目的とする処は現世では想像にも及ばぬ程高等の美天国即ち極樂に生れて無上の幸福を享受することにあり。浄土宗真宗の如きはこの宗教に属しておる。故に此の宗旨では現世祈りを大に排斥する。さて日本にて一般の民間に行われておる信仰は上の二つである。

然るに現代の有為なる士女の要求する処はもつと高等に進んで即ち現在より未来を通じて精神的に肉と共に幸福を求むる即ち三期の宗教である。

問 未来教は云何なる神を信ずるか。

答 未来教にては現世教の如く日月を神とし、また高山の神また水の神などやまた偶像の神を

祈るのとは違うて、此世界を超えたる天国の神とか、また高遠なる浄土に在ます如来を信じ、其無限の慈悲に救われるものとす。

問 未来教は何なる行をつとむるか。

答 未来教にて救いを仰ぐ処の方法は必ずしも一定しておらぬ。若し二者を挙げてみれば、真宗の如きは衆生は罪惡深重にして必定地獄に墮する者なれ共阿弥陀如来はそれを救わんが為に衆生に代りて苦難を受けて救いの道を立て給いしことなれば、我らは只其御本願を信じて如来の真を信じ得れば其時に救われしなり。其上は只如来報恩の為に念仏すべきものであると。我らが為に仏が願も行も悉く成就し給いしことなれば衆生には別に願も行も要らぬなりと教えておる。

浄土宗にては弥陀の本願は称我名号とて我名を称えて我を念ずる者を助け給うと信じて専ら只仏名を念じて臨終の夕まで相続すれば仏の来迎に預つて必ず往生を得るとす。

問 未来教は我日本に行わる内、何の宗旨がそれなるか。

答 浄土宗真宗などが此れに属しておる。故に此宗では現世祈りを大に排斥する。

問 第三期の円具教はいかに安心を立つべきや。

答 円具教は最も發達したる宗教にて仏教の中の大乗仏教其中の最も進化したる円満具徳の教

である。之を天台や華嚴にて円教と名づけておる。然るに天台や華嚴はいかに其教理は立派でも聖道即ち哲学である。理論としては実に至れり尽せり、いかに究むとも之を出ずることはできぬ。而して其最も理を尽し事を究めたる教理をして、実際に人生を救度する処の宗教として何人でも摂取し救済せらるるものは即ち光明主義である。

問 光明主義の信条の中に信仰の要求する処はいかん。

答 要求の中に多義を含んでおるけれども之を概括して光明生活と云う。即ち人の生れたままの心の生活は動物性を目的として活きんと欲しておる、又人生の真理を自覚せざるを暗黒生活と名づけ、信仰に入て人生の真意義を自覚し永遠の生命として円満の極に向上せんと欲する目的の生活を光明生活と名づく。弥陀の光明を獲得して眞の信仰生活に入たことである。

問 極樂往生と光明生活とは同一なるか否か。

答 極樂往生と光明生活とは能く其真意を会得してみれば同一である。極樂は別名を無量光明土と云う。即ち弥陀の光明の実現したる世界と云う意味である。

問 光明生活に現在と未来との関係はいかに。

答 光明生活に二位あり。之を仏在世の修道者に二種の涅槃あり。一を有余涅槃、一を無余涅槃とす。前のは釈尊の教の下に能く修行して正に道を証得する時は肉体を有ち乍ら神は涅槃

常樂の中に安住することを得。心は永遠の光明中に住しておるけれども身体は寒熱や飢渴の苦が免れぬ。これを有余涅槃と名づくるのである。次に肉体の命終りて正しく永恒常樂の光明界の実現したる処を無余涅槃と名づくるのである。夫と同じく光明生活にも、理想の光明界と、実際の光明界の二位ありて、正しく弥陀の光明を得、心靈復活して永恒の光明中に生活するものを理想の光明生活と名づけ、而して命終りて正しく無量光明の功德莊嚴の実現したる処を実際の光明生活と名づく。

問 光明生活の多義を含むとはいかん。

答 光明生活の中に多義を含むけれども、二義を以て撰することを得。一に最幸福、二に最高徳である。

問 最幸福とはいかが。

答 極樂の梵語を須摩提スモダ（Sukhavatī）と云い、訳して極樂また最幸福の国とも云う。弥陀の光明中に安住するときは現在に於ては、精神的に最幸福を感じらる。此肉体の命終れば実際に最幸福の涅槃常樂を感じらるる。

問 いかなるを精神的に最幸福なる。

答 人の世に在りて最幸福とは、身体が健全に財産も豊富に位置も高く、子女も饒おほくすべての

生活を円満に完全に為し得らるる者は幸福である。然れ共人の精神には貪瞋痴とんじんの煩惱ありて、いかに物質上の満足を得るも精神に於て全く不満を去り、不安を除きて真実に満足と安穩と平和を以て精神生活を為し得ることはいかがおもう。或意味に於ては眞の幸福は精神生活に在りと云うも然らんとする。人は生れたままの心にては、不安と不満との感じが免れぬ。若し信仰の光明を得て精神復活して光明の生活に入る時は、精神的に満足を感じられ、眞の幸福を感じらる。即ち肉体を有ち乍ら神はたましい最幸福の極樂に栖みあそぶと感じらる。眞の精神上の幸福は他人よりは窺われぬ。人一度弥陀の光明に生れ更る時は、自ら人生の真意味もこの中に感じられ、人生の眞価値も此に至つて認むることになり、自から我何の幸福ぞ斯く光明中の生活に至ると繰返し思う毎に自己の靈福を悦びて余りあるに至らん。即ち是れが精神の最幸福である。

問 光明生活の中最高徳とはいかが。

答 人の信仰生活に入る目的は、一方には実に精神的に幸福を感じずると共に、又一方には道德的に人格を円満に向上して至善に到達するを人生の目的とするにあり。之を光明生活の最高徳を目的とすと云う。言い換えれば光明の中に如来の聖旨に合う行為を努めて仏に成ることを目的とす。信仰の目的は一方には永恒常樂の幸福を得ること、即ち極樂に生るること、一

面は至善円満なる人、即ち仏になることである。

問　斯の教ではいかなる神に帰命信賴すべきや。

答　現在未来に通じて絶対円満なる尊き神尊、阿弥陀尊を本尊として、帰依信賴して、永遠の救度を仰ぐ。

問　阿弥陀尊とは一切諸仏の中の一仏なるや。

答　否、しからず。一切諸仏の本地本仏にして、諸仏に超えて独一の尊き神尊に在ます。經に「阿弥陀仏は最尊第一にして諸仏の光明能く及ばざる所なり」と示されておる。

問　其如来は何れの処に在し給うや。

答　如来、何の処にも在さざる処なし。經に「彼仏の光明無量にして十方の国を照して障礙する所なし、故に阿弥陀と名づく」と。聖善導の讚に、「弥陀の身と心とは法界に遍く衆生心想中に映現す」と。

問　いかに行めて救わるるや。

答　阿弥陀尊はミオヤである。我等は子である。ミオヤの如来は聖旨を現わして、「至心に我をミオヤと信じ、愛して我光明に生れんと欲して、我名を称念せよ、然る時は我光明中に生れん」と。言換えれば一心に念仏せよ。弥陀は念ずる心に応現して救わるるなり。

問 念仏に何の意義あるか。

答 三の義あり。一、請求^{しやうぐ}。二、感謝。三、讃歎とである。

問 請求とは何の義ぞ。

答 生れたままの人は未だ如来を信知せず、闇黒^{やみくろ}の生活をなしておる。請求して「如来よ、我は心闇く罪惡の凡夫にて必定墮獄の徒^{とも}なればあなたの慈光の中に我を救度し給え」と念ずることである。この請求に救我と度我との二義あり。二、感謝とは、已に救われたる上には、精神に無上の幸福を感じて、必定墮獄の罪惡なる我が、如来の光明中の生活として戴き現在より永遠の救いを被むりしは全く如来の恩寵なれば、其感謝が溢れて称名の声と洩れ出づるを感謝の称名と云う。

問 感謝は只口に称名するばかりなるか。又自分の行為にも現わるべきものなるか。

答 救を受けたる即ち光明に満たされたる悦びの溢れが感謝の声に現わると共に身の行為にも現われざるを得ぬ。真実に如来の慈悲に満さるる時に其慈悲に動かされて働くのは、是れ感謝が身に現われるのである。

問 讃歎の称名とは何なるか。

答 讃歎又咨嗟^{しきさ}とも云う。是如来無量不可思議の功德の光明を念ずる時は、自から其絶対不可

思議なる慈光に触るれば、只々感極まりてアアと、ナムアミダ仏と咨嗟するの外なきに至る。我等は如来慈悲の光明を離れて救わるることはできぬ。慈光に触るれば何とも云われぬ靈感が感じらるる。此の靈感にうたれる時は、アアと自づと咨嗟せざるを得ぬ、これを讃歎の称名と云う。

問 念仏三昧とは如何。

答 念仏三昧とは南無阿弥陀仏と云う衆生の一心に自己の総てを如来の中に投歸するとき、阿弥陀仏不可思議の光明を以て衆生の心に満たしむ。闇黒なる衆生の心は如来の中に入り、如来の心光は衆生の心の中に入り来り、闇黒と光明と合する時は闇黒は消えて明輝あきあかりと成る。念仏三昧は衆生心と仏心と一体となりて、衆生罪惡闇黒の心は如来無量功德の光明に靈化せらるることになる。光明生活の事に就きては他章にゆずる。

問 この信仰は新らしき宗教なるか。

答 しからず、先に述べし如く大乘仏教中の円教なので夫を何人にも実行せしむるように伝道するにある。教祖釈尊及び聖善導尊者、法然尊者等の真精神の信仰に外ならず。

上來安心の要領をのべし此の真理は実に理論にあらず実行にあり。宗教は人の生命を新しく生れ更らしむる処に真意あり。吾人は世の同胞衆に対して唯一の大ミオヤの光明を被む

りて新らしく生れ更り眞の同胞はらからたらんことを欲して御勸め申す次第なれば、願くば眞面目に道を求むると云うよりは寧ろ熱誠に道を修して吾人の言の眞理なることを証知し給わんことを希望するものである。